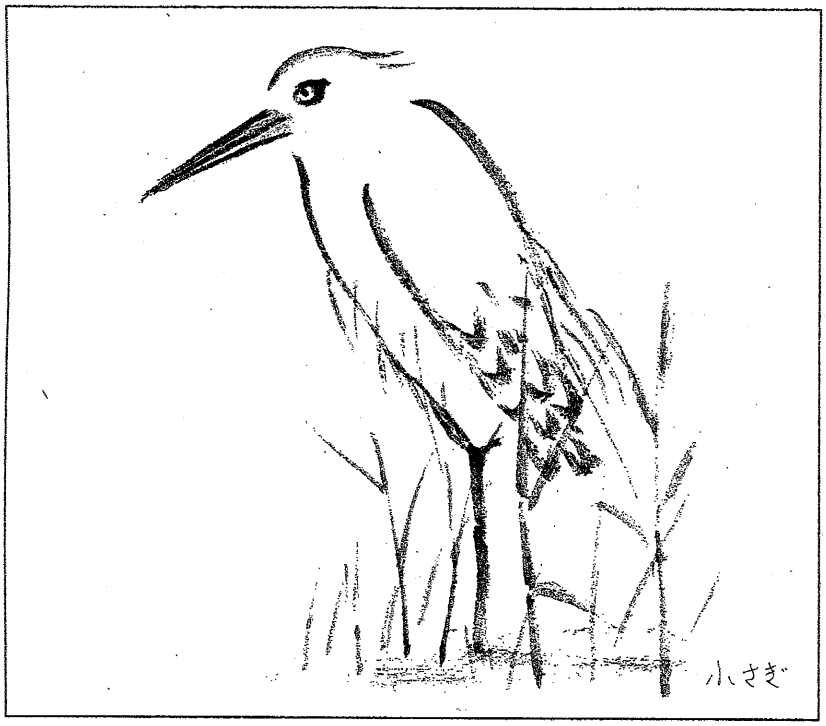
オリーブの樹

第98号
2010年5月16日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

Ｐ　２　リッダ闘争の５月に　　重信房子
Ｐ　３　四月の歌　　重信房子
Ｐ　４　独居より　順序が逆。まずアメリカとの安保条約再考こそ基地問題解決
Ｐ１０　重信さんとの交流コーナー
Ｐ１１　アラブ物語（１０）－ＰＦＬＰとの矛盾－７３年ドバイ闘争の時代（４）
Ｐ１７　「あれから４０年、よど号問題を語ろう」へのメッセージ　　重信房子
Ｐ１８　「拡張型心筋症の丸岡さんに生きる途を！の会」で共に生きよう
Ｐ１９　拡張型心筋症の丸岡さんの入院を実現させよう！

重信房子さんを支える会

★★★リッダ闘争の５月に★★★

再びリッダ闘争を闘った５月を迎えています。５月はまたイスラエルがパレスチナ人を虐殺追放し、「イスラエル建国宣言」をしたナクバ（民族の大破局）の５月でもあります。あのナクバからすでに６２年目の５月。リッダ闘争から３８年目の５月。パレスチナには公正な平和が訪れるどころか、今も土地収奪占領、パレスチナからパレスチナ人の追放が広がっています。

あの６３年前の国連決議同様に、今日までユダヤ資本やシオニズムと結託した米欧政府がイスラエルの犯罪を許しているからです。

５月のＮＰＴ会議（国連核不拡散条約再検討会議）一つとっても、こうした世界の歪みは明らかです。イスラエルの核兵器保有は誰もが知っていながら、不問に付されています。その一方で、イランの核を騒ぎ立てて、北朝鮮の核を封じ込めようとしています。日本政府もまたアメリカの利害に日本の「国益」を重ねて、不公正な歪んだ「世界秩序」に加担しつづけています。米軍占領下の戦後の呪縛のままに。

こうした世界に自ら民族の生存をかけて、パレスチナは６３年も闘いつづけることを強いられてきました。今もそうです。

リッダ闘争は、他の当時の戦闘と同様に、正義と公正を求めたパレスチナ解放の闘いでした。戦士たちは、やむにやまれぬ時代の良心を引き受けて闘いました。リッダ闘争は、時代の要請と共に限界も負った戦術ではありましたが、パレスチナ人民と日本人民ばかりか世界の闘う人民の友情と連帯の７０年代を育ててきた、国際主義の新しい力でもあったのです。

あの闘いから３８年。今もパレスチナアラブでの友情は、ベイルートに亡命中の岡本さんと繋がり、また、日本とパレスチナの新しい連帯を育てています。リッダ戦士たちの時代の良心は、闘いの形、方法は変わっても、世界の各地で今も深く引き継がれています。こうした人民同士の連帯は、歪んだ「世界秩序」をこれまでも告発し、正してきた力です。こうした国際連帯は、各国政府の不公正な政策を押し留める力を今も育てています。

今、ネタニヤフ政権はかつてない残虐な民族浄化政策をつづけています。パレスチナの土地、伝統の強奪と、パレスチナ人追放と暗殺をくり返しています。

今、闘いつづけること、闘いによって統一したパレスチナ解放闘争を復権させること、ここにこそ、ＮＧＯや国際連帯と呼応した解放の新しい力が育っています。パレスチナの統一した闘いの復権は、また翻って、日本の変化、変革を求める力と結びつくでしょう。日本の辺境にあっても、闘いつづける限り希望は育つことを私は知っています。リッダの戦士たちがそうであったように。

リッダ闘争３８年目のこの５月、パレスチナの多くの戦士たちの一人として闘い抜いたリッダ戦士たちの志を深く刻み、連帯の哀悼を捧げます。

重信　房子

四月の歌

重信　房子

あかつきにみぞれ雪舞う春の日は東拘入所九年目記念
初めての青天井の大きめの運動房で走る走る
曇り空穀雨の暦の夕方に空気を開くように吾子訪れる
運動房向かいの屋根の姫女苑早くも緑小さく萌えいで
点滴の五時間半の抗癌剤朝から夜まで雨の一日
早朝の通気孔開け小鳥鳴く春の晴天知るも喜び
陽の光まっすぐ浴びた一輪のタンポポの咲く獄舎の一隅
クウォウォーンと偵察飛行を真っ先に伝えし犬の最期に花びら
四月尽最高裁の裁きなし五月のためにガラスを磨こう

独居より　4月1日－4月10日

順序が逆。まずアメリカとの安保条約再考こそ基地問題解決

重信　房子

４月１日　未決にて再び愛でん桜花
瞑想の房に満開と咲く

去年から、年度末には最高裁判決が出るだろうと言われながら、新しい年度を未決のままに迎えています。また、癌治療の方も転移は見つかっていないものの、腫瘍マーカーは高止まりのままなので、３月から点滴治療に入っています。その効果を知るのもこれからです。昨日新治療で、腫瘍マーカーがどう変化したか検査するための採血をしました。来週、その結果がわかります。

年度末までに、整理しようとしていた数々の作業や資料の処分も未だ終わらずに、新年度になりました。昨日の年度末には、採血に加えて、友人も宮崎先生はじめ、渡辺先生、Ｏ先生も見えて、楽しくてんてこ舞いの一日でした。

でも、３月から副作用で白血球が減少していて、免疫力が落ちているからと、運動房に出る許可が下りていません。昨日も採血後に「未だだめです。金曜日にまた採血してチェックし、来週の診察でドクターからＯＫかどうか言われるまで、外に出るのはだめです」と言われてしまいました。運動房と言っても、独房サイズで、床、天井、両側面がコンクリート壁で、ドアの反対側が１０センチ×４センチのこまかーい格子なので、外が良く見えるわけでもありません。そこから自然の風が入ってくるというだけで、暗い房です。それでも、密封パックの人工的に回流する空気よりもましで、フーッと一息つけるし、コンクリートの床でも走れるので、外に出たくてうずうずしています。３月マスクをして一度は運動ＯＫとなっていたのに、３月２４日の再点滴治療から運動不許可で、逆に病人気分になってしまいそうです。

３月２７日には、ＪＡＰＡＣ主催で、３月３０日「土地の日」の記念の集いがありました。上映やパレスチナを訪れた人たちからのパレスチナの実情報告や交流があって、とてもよい会であったと友人が伝えてくれました。

また、おとといの３月３０日の土地の日、２００２年に日比谷公園でイスラエルの暴虐に抗議自決した檜森さんの追悼の集いもありました。ユセフ檜森さんは、リッダ闘争の戦士と志を共にした仲間です。彼が抗議自決した時刻に共に居てあげたいと旧友たちが集まり、哀しみと怒りのトランペット演奏などで連帯し、献花したことでしょう。私も連帯の挨拶を送りました。

「土地の日、あの時間、ユセフ檜森さんと共に居てあげたいという志、心に響き、感謝の思いで読みました。あの３月３０日、「土地の日」の後、小菅の旧舎の独房に入り込む桜吹雪を呆然と見つめていました。衝撃的な彼の自裁を何度も問い返しながら、もう８年たってしまうのですね。ユセフが、その年の秋にも、翌年にも訪れたライラとゆっくり語り合ってくれていたら……と、思ったものです。パレスチナは今も厳しく取り残されています。だからこそ、もっともっと深く連帯し、献花を！と、思わずにいられません。

“桜花来よと獄窓開け放ち風の舞見つ君を弔う”

自裁を知ったあの時の一首です。皆様の集いに連帯を伝えます。クラリネットが哀しみと怒りを突き抜けて、サイダにも、バールベックにも、能代の海にも、天を巡って届くでしょう。私も心してその音を聞いてみたい！」こんなメッセージです。

今日は、ルーバーの隙間は、晴だと思ったら、もうう す曇りです。

午後一番、姉が面会に来てくれました。「ふうちゃん、こんな帽子どう？！」と濃いネイビーブルーのスキー帽のような帽子。抗癌剤の副作用の脱毛対策です。ありがとう！未だ脱毛してないけどね。ちょうどいいと思う！ありがとう！」と、わいわい騒いで、１０分。未だ、帽子の差し入れの特別許可がないので、差し入れ窓口で許可されないかもしれないと、別れてから思い至りました。きっと窓口で断られてがっかりしているでしょう。ごめんね。

先日は、「ビラ配布無罪」の逆転判決には、当然の判決ながら、ほっとしました。有罪は人権侵害もいいところ。第一審の判決は、公務員の人間性を否定する有罪判決でした。何ら公務員としての特権の利用や瑕疵はない上に、休日の政治活動まで許さないという憲法違反の有罪判決でした。第一審有罪の時には、ブッシュ小泉時代で、戦前の治安維持法を警察、検察、裁判所一体で進めていると、激しい怒りを感じたものです。

今回の逆転無罪を言い渡した裁判官は、国民を萎縮させるだけのこうした憲法違反の判決は裁判員制度上も不利という判断があったのでしょう。

「国家公務員法の規定そのものは合憲で、適用の禁止範囲が広すぎるから違憲」ということらしい。

日本は、とにかく「民主主義」が検察警察の恣意的な基準と裁量にゆだねられている社会です。憲法の適用によって裁かれるべきは、警察、検察、裁判所の超法規的な采配そのものなのです。

その姿を晒していたのが、国松元警察庁長官狙撃事件の時効幕引きの公安部長の「超法規」の不遜な会見です。憲法違反の自分たちの行動がちっとも見えていないのです。時効なのに、オウムと断定なんてデタラメです。

また、３月末には、「短歌研究」４月号を受け取りました。そこに、２０首の私の歌が載っています。短歌の先輩である歌人作家が勧めてくれて、アレンジしてくれたものです。「風の共和国序章」というタイトルです。

“はたちだった恋より恋しい革命と
何方へ戦がんわれもろともに”

など２０首。

何のコメントもなく、歌人の方々の中に２０首が編まれていて、編集者の心遣いにとても嬉しく読みました。こうしてプロの方々の中に、素人の私の歌が置かれると、「力み」が見えてはずかしい。でも、これを機会に「風の共和国７０年抄から２０１０年抄」まで、次々とその年の闘いや生活の日々を叙事詩のように詠もうと思っています。また、自分で宿題を増やしてしまいそう。でも、これは判決の後ゆったりと叙事短歌を詠むことにします。

夕方。「金曜日」編集室より、４月９日発売の「金曜日」に、私の一文を投稿欄に載せたいとのお便り。先日、「金曜日」社発行の「佐高信×鈴木邦男　左翼・右翼がわかる！」の本を鈴木さんから送ってもらったので、短い感想の手紙を書いたものです。それを載せたいとのこと。ほんの短い感想ですけれど。

４月２日　土を乞い空とみどりを乞いながら
密封パックでラジオ体操

今日は、桜が満開に咲いている所もあるらしい。私の方は、３月２４日の点滴の日からドクターストップで、まだ運動房には出られないまま。点滴直後は白血球が上昇し、その後下がりはじめました。白血球が減少しすぎると、免疫力を失うので、感染を避けるようにと、運動が禁じられてもう１０日目。

今日も採血。血圧が高めになってしまっています。桜は見られないまでも、外気を吸ってみたい。密封パックの中にいると、そんな思いを持ちます。それでもこの桜満開も肌寒いようです。

午後に、メイの面会。今日はメイとみどりが９年前に日本に向けてベイルートを発った日。私の逮捕の後、これまでのすべての学業も生活条件を捨てて、日本の国籍を取って帰国することを決断しました。ベイルートを飛び立って、４月３日にはじめて日本の土を踏んだのでした。

「あの頃大変だったね。もう９年なのね」「成田から満開の桜が散りはじめてきれいだった。ああこれが話してくれた日本の桜か……って」「そして、桜の枝を持って、翌日に警視庁に面会に来てくれたのよね」。話をしながら、その間、私よりも彼女の方がどんなに苦労しただろうかと考えました。友人たちに助けられ、知らない日本の社会の中で、ゼロから必死で生きてきたことでしょう。それらをゆっくり心から語り合える条件は未だ訪れていません。「ありがとう」「元気でね」１０分間の面会です。そんな言葉に心の様々を託すしかありません。ただ、申し訳なく感謝するばかりです。

今日受け取った新聞（昨日の夕刊と今日の朝刊）には、警察庁が３１日に、最高検は４月１日に足利事件の冤罪を検証した結果を公表した記事が載っています。

警察は、反省点として、先入観による取り調べ、科学捜査への過大評価をあげています。「犯人に違いない」とする捜査は、国松長官事件でも失敗しているように、足利事件に限らずすべてにわたっているという反省と自覚が欠けています。ことに「反社会的」と警察、検察がレッテルを貼る左翼や「やくざ」や「宗教団体」に至るまで、先入観の重刑攻撃ははなはだしいものです。私に対しても、「やったはず」の先入観の「赤軍罪」です。警察、検察、裁判官まで同じでした。それなのに、「足利事件」だけが誤りと狭めた「反省」をして済ませています。取調べの全面可視化にも、第３者期間による検証にも触れていません。最高検に至っては、自らの独善による「正義」の独占が、警察にこうした捜査を強いているという反省もまったくありません。「(菅谷さんに) 警察では供述した内容を否定してもいいことを理解してもらい、自分の言葉で記憶で語ってもらうような聴取をしなかった」ので「自白」が偽だと見抜けなかったとか、警察庁の行ったＤＮＡ鑑定を過大評価したとか、警察の問題とそれを見抜けなかった検察官一個人の問題の如くに言い放ち、あた

かも自分たちが被害者の如き傲慢な意識がみえみえの最高検報告書です。そこには、再審の無罪判決とのくいちがい（判決では、公判中に否認に転じた菅家さんに主任検事が再び自白を迫った取り調べを「違法だ」と認定しています）について、最高検報告書では、まったくほっかむり。采配を振るったくせに、警察庁報告書よりも他人事の形だけのものです。

しかも、「最高検異例の会見」と、伊藤鉄男検事らが、登場した割に、再発防止の対策もまた検察内の身内でやろうという考え方だけです。直ちに日弁連は、誤判原因究明のための第３者委員会の設置を求める意見書を出したようです。最高検も警察も取り調べの全面可視化にも第三者機関の検証も認めずです。

足利事件の冤罪の判決言い渡しの時、裁判官らがその席から頭をたれて菅家さんに謝罪したという事実が、無視沈黙はできないと警察、検察庁を動かしたのでしょう。

きっかけはそうした保身であっても構いません。ただ、公正な捜査の実現とその方法の具体化を望みます。それは、真剣に第三者からも、また、尋問され拘留されている私たち当事者からも、意見をきちんと聞くことからはじまります。それらの意向を踏まえれば、権威の面子と保身ではなく、憲法の公正な適用の方法が当然問われるでしょう。

もう一つ、今日の新聞に、「記者会見オープン化の波　フリーネット記者にも門戸」という記事。「政権交代から半年たち、閣僚の記者会見が質量共に変わってきた。昨年９月に、岡田克也外相が先鞭をつけた記者会見の『オープン化』を実現する閣僚は、総務省によると、今１２人。以前ではありえない質問も飛んでいる」と、朝日の記事。記者クラブ制度は、大マスコミの特権と権力との癒着による一方的な権力側の情報を国民に垂れ流す構造の一つでした。国際社会から見ると、独裁国家の手法が日本の記者クラブ制度でした。それが、やっと変化してきたようです。

こうしたこと一つとっても、また、検察や警察の対応の変化も、やはり政権交代の効果であると思います。「第２自民党化」とか「決断できない」「小沢支配」あれこれマスコミに叩かれつつ、変化は見逃せません。もちろん、日米安保の再考や基地撤廃の計画のロードマップなしに、「最低でも県外」などにすることは不可能です。戦略問題をなす「普天間基地」で、米国にも、沖縄にも納得できる案などないのです。「米国はわかってくれる」「守ってくれる」と言いつつ、政権とマスコミの「米国幻想」には、いつも世界の現実との埋めがたい隔たりを感じています。それでも情報公開などのなどの変化は大切です。確かに「資本主義の民主的政治を求めるレベルに過ぎない」としても、それこそが戦略的に重要なことです。少しずつ変化を育ててほしいと思います。

今、もっとも変化が問われているのは、「アメリカの抑止力」「基地存続」や「死刑制度賛成」の旧い政治やその幻想を常識のように煽ってきたマスコミです。「日本の当たり前」に馴染んできた社会の変化を「ふらふらの三党政権」にゆだねず、下からのまっとうな世論を育てるように力を注ぐことだったと思います。自民党時代では入れないような人が内閣府などに入って、制度や法を変えるのもやれる人はどんどんやってほしい。マスコミでも良心的な人々の粘り強い努力の結果、特権的にお上の話を聞いて記事にするというあり方が変わってきています。政権の変化や揺らぎは、結局いいことだと思います。

「普天間」に限らず、安保・基地はいつ終わらせるのか？日本にいつまで基地を許すのか？まず期限を決めること、その中海兵隊は全部撤退せよと言えばいいし、言えないならいつまでか期限を切ること、その議論の上で、基地移転は米国側が自分たちの責任で決めるべき事柄です。まったく順序が逆。まず、アメリカとの安保条約再考こそ基地問題の解決です。今から鳩山首相はちゃぶ台をひっくり返せるか？！　しないし、できないでしょうけれど。結局、また沖縄に泣きを入れて、さらに支持していた進歩的な人々を怒らせるのでしょうか。基地問題は軽々ではありませんから。

でも、日本人も鳩山首相批判より、「鳩山がんばれ」と米国批判を合唱してもいいのでは？　中東では必ずそうなる構図なのですけれど……。

４月４日　桜花雨にぬれつつ風に圧され
それでも散る日自ら決めるらし

４月３日の土曜日は、満開の晴天で、やっと桜日和だったようです。それでも寒いみたい。今日も桜がきっと美しい日。ちょうど、「オリーブの樹」編集室が発送作業をする日で、終わったら、花見をしようと話しているとのことです。いいな……。でも、だんだん曇り空。夜は雨で寒そうです。それでも春彼岸の桜の開花ですから、長持ちしています。

私の方は、この週末は、少し片付けたり、資料を読んだりと、相変わらず宿題に追われています。

でも、外は桜が満開！と思うだけでほっとするのですが、丸岡さんのことが気がかりです。ちょうど届いた山本さんの手紙では、丸岡さんは面会の時ははずすが、それ以外の時は酸素マスクをつけている状態らしいのです。丸岡さんの体調が危機的で、弁護士や友人たちで刑の執行停止を要求していました。これまでは１週間程度で却下されたのが、今回は１ヵ月以上待たされて、結局やはり３月年度末に却下の回答が届いたとのことです。はなはだしい人権無視。ことに「超法規的措置」を強いた日本赤軍には最高の重刑を次々とかけてきた検察です。今回も検察は、治療のための執行停止を拒み、死んでも構わんと、殺そうとのたくらみとしか思えません。これは、明らかに陰険な死刑執行であり、「執行停止」の法の基準を逸脱しています。

こうした丸岡さんの情況に対して、徹底して人権、人道上の当然の措置として執行停止が為されるよう引き続き求めていくとのことです。検察は政治的報復を止めて、人道に沿った行動をいつとるのでしょうか。新政権の変化の中で、獄中処遇・司法制度改革を！祈る思いで、丸岡さんの病状をうかがっています。丸岡さんを支えている弁護士さんをはじめ、救援の皆さんに感謝し連帯しています。

送られてきた「女神の移譲」（四方田犬彦著）を読みました。前に「新潮」に載っていた「赤軍の娘そして息子は」の文章も収録されています。中でも本のタイトルに使っている「女神の移譲」は、とても面白いです。四方田さんは、フィールドを自分の足で、現認し、そこから掘り下げて、思わぬ方向へと思考や発見・分析を読者に提供してくれるので、目を開かせられるのです。

この「女神の移譲」もトルコのイズミールから、さらにヘラクレイトスの誕生の地エフィソスというところまで行って、発見思考した一文です。そこはアナトリアの月の女神と豊穣、収穫の女神である地母神キュベレが信仰された発祥の地だそうです。

今では、歴史に埋もれていても、その地では信仰の伝統愛着が生きているようです。そして、キュベレが実はアポロンの妹、ギリシャ神話の狩猟の女神へと収奪位置付けられていった歴史をとらえています。エフィソスへのギリシャ人入植者によって地母神がギリシャ神話の女神へと転換されていった歴史を考察しながら、歴史の正史へとキュベレをとらえようとした試みです。アナトリアの地母神キュベレ、ギリシャ神話のアルミテス、ローマのダイアナ、ヒンドウ神ドウルガまで、アナトリアの変化移譲が続いた様を語っています。そのため「女神の移譲」のタイトルです。中東にいた分、興味深く読みました。

４月５日　ジャカランダ咲くベイルートへ行くという
友に伝えし地中海の辺

今日は雨。未だ、運動房に行ってよいという許可が下りず、密封パックの中から出られない。体調は悪くはないのですが……。

先週面会の友人たちが差し入れてくれた本がどっと１０冊も届きました。その中に時代小説も、ダン・ブラウンの新書「ロストシンボル」も届きました。楽しみに読みます。ありがとうございます。

午後は久しぶりの友人と面会。４月末に、ベイルートへリッダ戦士たちの墓参りに誘われて行くとのこと。いいなあ。ジャカランダもきっと咲いている頃。美しいベイルートの海が目の前に広がります。ベイルートで、ピジョンロックのところは、友人が水死した所。その友人はラーメンが好きだったので、ラーメンを海に一つあげてください。あ、バールベックもビブロスもいいですよ。アルファベットの遺蹟の出たところ、などと話しているうちに、あっという間に時間切れ。雨の日本と違って、もうベイルートは青空だな、乾期に入ると、１１月頃まで雨は降らない温暖な良い気候です。もう少ししたら街のどこからでもジャスミンの匂いが漂ってくる季節。今は赤いけしのようなアネモネ科の花、春菊の黄、ベカーの黒々とした地面から湧くように花畑まっさかりの季節に入ります。

レバノンでは、反シリアだったジュンブラットが、シリア-アサド大統領に「ごめん」と謝罪して、シリアとレバノンの共同戦線は強化されています。ジュンブラットは、２００７年ハリリ暗殺後、シリアをその犯人と決め付け「野蛮なダマスカスの独裁者」などと、アサド大統領をなじっていたのです。それを政治道徳にもとる見苦しい行為と謝罪しました。

これらは反イスラエル戦線形成をずっと粘り強く求めてきたヒズブッラーのナスラッラー師の仲介によって和解に導いたものです。

３月末にジュンブラットはダマスカスに居て、アサド大統領と会談してきました。このように、ネタニヤフ政権のパレスチナ弾圧とレバノンシリアへの戦争挑発への危機感から、新しい反イスラエル共同が生まれています。

中東の人々は米国にイスラエルを統制する力は無いし、期待もしていません。ことが起これば、歴代米政権はどんな違法なイスラエルの行為も、ずっと支持してきたのですから。

また、パレスチナでは、ネタニヤフ政権の強権のために、アッバス大統領は身動きがとれずに居ます。自らの人権の要求であるガザ封鎖解除やパレスチナの統一に力を注がず、和平交渉幻想と西側からの資金援助や自分たちの特権ばかり考えていては、さらに力を失うでしょう。すでに大統領の任期切れのままに「６月総選挙」と引き伸ばしてきた時が迫っています。

ナクバの５月、新しい活路を示せるでしょうか。パレスチナ人民は待っているというのに。

４月６日　無期刑の病棟の友の獄舎にも
桜吹雪は届くだろうか

曇り空が続いていますが　午後少し晴。ルーバーの隙間の遠くに見える桜の木は、今年はちっとも花をつけていません。いつもはラジオが桜満開という頃に、少し遅れて白い花が咲くのですが。遠くのしかも狭いルーバーのほんの隙間なので、枯木立のようなまま数本とも花をつけていないようです。咲きもせず、また、数日もせず……。鳩山政権みたいです。密封パックで運動には出られない分、室内体操に精を出しているところです。午後旧友の面会。丸岡さんの救援のこと、これから却下された対策を弁護士たちと話し合うと言っていました。気力でがんばり過ぎてしまうところがありますが、丸さんは元気のようです。

午後、「オリーブの樹」９７号受け取りました。ありがとうございます。早くも、奈良のピースウォークのことも載っています。身近なデモの様子を知ると、わくわくしますね。辻邦さんの文で、改めてイラク侵略を思い返しています。侵略に加担した検証は、日本ではなされていません。けじめのないこうした一つ一つが日本をいいかげんでなし崩しの無責任な国にしています。裁かれるべき権力者は内閣を去っても裁かれずにいます。そればかりか、竹中平蔵をはじめ、政権当時に利益を分かち合った大企業にポストを得、ぬくぬく快適生活です。

先月友人から「オリーブの樹」を読んだ感想の中で、もう受刑処遇の準備として文章を短く書く練習をせよと、助言を受けました。そうか「独居より」も、もう少し縮めないと……などと反省しつつ、読んでいるところです。でも書けるのもそんな長い条件ではないでしょうから、思い切り書くのもいいかなと。流麗な文は書けず、思いのままの悪文ながら。

ラジオでは中国で日本人の死刑執行。世界の流れに逆行している米、日本、中国の死刑制度がこれからますます問われるでしょう。こうしたことも死刑停止から、廃止のきっかけにしたいものです。

４月７日　診察日廊下を急ぎ思うこと
シスプラチンの効果はいかに

今日も未だ運動不可。

新聞では「核の使用制限に新戦略」との記事。結局「非保有国には、使わず」と言いつつ、先制不使用もなく、核独占にも変化なしです。核の管理独占を「反イラン」「反テロ」の名で、強化する考えのようです。

夕張ぶどう酒事件、「再審判断差し戻し」との記事。また、責任のたらい回しになってしまったようです。再審を決めるのには、審理不十分との判決。「却下」よりはましでも、１９６１年のもう半世紀前の事件です。即、再審して問うべきでしょうに。この長い間、どんな思いで「死刑囚」として無罪を主張しつづけてきたことでしょう。この国には「疑わしきは有罪」があまりに慣例化しています。司法「裁判官」は実質において検察官になり、裁判官が添え物でしかないためです。９９％以上という起訴有罪率にそれは示されています。

３時過ぎに診察に呼ばれました。３月からのシスプラチンの新しい治療が私の癌に効果があったかどうかと、結果を楽しみに急ぎました。ＣＥＡは２９．８（前回３５）ＣＡ１９－９は２１．６（前回３０）と下がりました。それで明日から同じ方法で第２クールを行うことになりました。これまでは、新しい薬の効果はあっても、第３クールくらいになると、また、腫瘍マーカーが上がってくるので、今回の第１クールにだけでは判断できません。それでも良い方向に向かっているようです。

明日から経口薬ＴＳ－１を３週間、そして４月１５日と４月２８日に、５～６時間の点滴でシスプラチンを４０ミリグラムずつ２回投与するという第２クールの計画を立てました。おさまらない涙目と朝起きた時の鼻血の症状を訴えると、耳鼻科で一度診察してもらおうとドクターがアレンジしてくれるとのことです。白血球は２８００まで下がっていたけれど、後は３０００を越えたので、明日から点滴の前日の４月１４日までに１週間は運動房で運動しても良いとのこと。やっと、ＯＫです。やはりＣＥＡが下がるとほっとします新しい抗癌剤点滴治療は、期待できそうです。数値に一喜一憂しないと言いつつ。

房に戻って、たくさんのお便りを受け取りました。ありがとうございます。返事を書きたいけど。メディカルレポートやちょっと読んでいるうちになんだか疲労感で、早めに寝ることにしました。それでも１１時過ぎくらいか。

それから、今日は整髪もしました。３ヵ月に１回なので（前は１ヵ月に１回でした）短くカット。鏡でしみじみと年配になって母に似た自分を発見。

４月８日　甘夏の匂いあふれる独房で
友の便りを繰り返し読む

今日は第２クールのはじまりです。運動房に出られるなと思ったら、今日は運動事態が休み。ウィークデイは、３０分の運動になっていますが、２週間おきに木曜日には運動がない日です。残念。

血圧が昨日くらいから高そう。顔が火照り、熱っぽい。測ってもらうと、１４８の７４。いつも１１０～１２０台なので、気分が良くないところです。

昨日投函用の手紙の準備を全部終えずに寝たので、入浴と手紙書きとあれこれの手配とバタバタ。

それらを、昼休みにやっと終えたところで、面会。大谷弁護士です。先生も引きつづき多忙です。新政権の障害者の制度改革などに弁護士として加わっていて、超多忙のようです。久しぶりに話ができて良かったです。判決が出た時のことなど話しをしたりしました。ちょうど３時過ぎに一般の面会人のお知らせ。それで先生と別れて、そのまま面会に見えた山本さんと楽しくいくつか話をしました。大谷弁護士と山本さんと話せたせいで、きもちも高揚しているせいか血圧の高かったことも忘れて何か仕事をたくさんしたような気分。

ちょうど届いたお便りと資料の中に、日本赤軍メンバーの手配ポスターが４月から新しくなったとのネット記事が入っていました。奥平さん、佐々木さんは、日本でパスポートを取得していたとして、そのパスポート用の写真が載っているとのこと。海外のみんなのことを申し訳なく思い返しています。

４月９日　運動房桜花びら足下に
春の証を掌にとりて嗅ぐ

今日は３月２３日以来の運動房へ。マスクも無く素足で走る態勢で行ったら、「大丈夫？素足はやめたほうが良い」と担当刑務官に言われてしまいました。「じゃあ、今日だけ裸足でね」と答えて、運動房に入ると、足下のほんの一枚の薄いピンクの桜の花びら。嬉しいな。掌にとって握り締めたり、楽しみつつ走りました。やっぱり気持ちいい。それに今日は晴。

走り終わって戻る前に見ると、新しいプランターが６つ。どれにも色とりどりのパンジーが３株ずつ植えられています。「うわーきれい！」。しばらく運動房に出て来ない間に、新年度の花が届いています。格子の隙間から覗くと、タンポポ。「あ、タンポポがほら２輪咲いてる！」

春の景色はやっぱりタンポポとオオイヌのフグリ。旧舎の時には、土の上の鶏小屋のような運動房を走ると足下にタンポポも、オオイヌのフグリもはこべも咲いていて、クローバーの４つ葉だって見つけたこともありましたけど……。今は、触れることはできません。爪を切ったり、気持ちも晴れ晴れで、３０分を過ごしました。

しばらくして血圧の測定。昨日と同様高い。１４８の８０です。少し動悸もするし……。それ以外は大丈夫。午後はゆりとガーベラが届きました。甘夏も一杯。甘夏は好きなので、もりもり食べています。

４月１０日　花ぐもり満開の空見あげつつ
西山太吉の境涯想う

今日は土曜日。今週は先日届いた西川公判関連の文書作業。補充書面のためです。週末は、やはり集中して文書作業するのにはとてもふさわしい。新聞配布と三食の配膳と受信物の交付、それに朝と夕方の点呼以外は「未決」なので、自由に書き物ができます。

新聞を開けると密約を認めた原告、西山太吉さんらの完全勝利の判決の記事。

「１９７２年の沖縄返還の際に日米両政府が交わしたとされる『密約文書』をめぐる情報公開訴訟で、東京地裁は９日、密約の存在を認めたうえで、国が文書の不存在を理由に開示しなかった処分を取り消し、開示を命じる判決を言い渡した。原告一人当たり１０万円の国家賠償も命じた。杉原則彦裁判長は、文書を破棄したことの立証を国に求め、『国民の知る権利をないがしろにする国の対応は不誠実だ』と述べた」と、朝日の一面の記事です。

西山元毎日新聞記者は、どんな想いだろう。闘い、闘いつづけてきた正義がやっと実現した、珍しいケースですが、やはり政権交代が大きく作用しているでしょう。裁判官の中にも権力におもねることなく、国民の側にも法を公正に適用しようという風潮が強くなっているように感じます。

西山記者は２００９年に敗訴してもめげずにこの情報公開訴訟に持ち込んでいました。「『文書が存在しない』ことを理由に行政機関が、不開示とした処分の取り消し訴訟は原告にとってハードルが高いもの」だったようです。なぜなら、「『文書が存在すること』を立証する責任は原告にあるが、役所が『ない』と言い張

る場合『ある』ことの証明が難しいためだ」とのこと。

それなら、役所は都合の悪い文書は「ない」で犯罪を隠し通せてしまいます。今回は、国民の知る権利に軸足を置いて、「あった」のだから「ない」という紛失立証は役所の責任として、密約開示命令を行ったことが画期的だとのことです。ところが、判決を受けてすぐ「外務省にはない」と岡田外相の発言。そうではなくて、外務省の犯罪捜査を行うべきでしょう。「あった」のを「なくした」証拠隠滅の犯罪として、密約と同様にきちんと問うべきです。第三者機関がこの判決に沿って調査解明することが最低必要でしょう。

国家の犯罪を追及した記者が、国家の嘘と罠によって「情を通じた犯罪者」に仕立て上げられたのです。あの７０年代以降今日まで、西山さんはどんなに口惜しかったでしょう。国はこうして保身のために個人を平気で罠と嘘で圧殺します。世界中にあることだけど、日本も巧妙です。「国」とは検察や外務省を中心とする官僚と自民党の政治家たち。

この密約開示命令の判決は、時代が決して後戻りしないことを感じさせます。時代の地殻変動を起こさねば！ まだまだ政権はぐらぐらです。いつ基地をなくすのか？ いつ安保を従属的なものから解消するのか？ その方法はいつまでに？ 「５月までに」と、「政治と金」で攻め立てられてから、首相はだんだん面子の小手先になっていっているようです。

「たちあがれ日本」とか、他にも新党が生まれるとか。自壊する自民党、実際的には、アメリカとの距離のとり方では、民主党も含めて横並びのまま。それでも、こうした中で、地殻変動は静かに起きています。そんな時、国民主権と平和と人権のメルクマールとして、やはり憲法９条を分解線とする政治の再編が生まれてほしいものです。国民の９条に対する意志を受けて、１０年、２０年先を見越し、基地撤廃・安保廃棄へと日共も社民党も包み込むような広がりの国民勢力の成長を待ちたいです。「密約開示命令」を受けて、これまでの「常識」の呪縛を解き放って進んでほしい。

――重信さんとの交流コーナー――

棄民の反撃

辻　邦

■拡大する貧富の差

５月３日、『自由と生存のメーデー１０』実行委員会主催の新宿デモに参加した。ことしのテーマは「逆襲の棄民　パンドラの箱が開く」だった。

思えば小泉純一郎と竹中平蔵による「規制緩和」という戦後史上最悪の暴政によって、高度経済成長時代から人々が見続けてきた「一億総中流」なる擬似夢は完膚なきまでに破壊された。資本主義の本質である「弱肉強食＝大多数の敗残者の屍の上で富を貪る資本家階級」という構図は誰の目にも明らかとなり、資本家と被支配階級という二つの階級の存在が、白日の下に晒されるようになった。

実に皮肉な話ではあるが、小泉・竹中コンビの暴政は、ある程度の社会資本の調整・富の再配分を実施することで資本主義社会の矛盾を隠蔽してきた社会民主主義やケインズ主義といった擬似社会主義・欺瞞的資本主義の外套を引き剥がし、資本主義の決定的本質を浮き彫りにしたという点において「評価」できるであろう。もちろん彼らがそんな事を目的としてその政策を実施したわけではないにしても、だ。

そうは言っても、小泉・竹中路線、所謂「新自由主義」路線が人々の生活に深刻な悪影響を及ぼしていることはまごうことなき現実だ。しかもそれとあいまって、リーマン・ショックに端を発した世界同時不況以来、日本経済が深刻なダメージから立ち直る兆しはいっこうに見えてこない。いまや正社員に替わって日本経済の支柱となっている非正規雇用労働者の大半が、「新自由主義」と世界同時不況の相乗効果により、大きな経済的不利益を被っている。一昨年末から報道されている「派遣村」問題等を見るまでもなく、トヨタ自動車に代表される大企業の経営者・資本家は、都合のいい時には非正規雇用という形態を最大限に利用して膨大な利益を上げていながら、営業利益に翳りが見えた瞬間に「会社存続のためだ」とうそぶき、ボロ雑巾のように非正規雇用労働者を巷に放り出して平然としている。大企業の多くが巨額の内部留保を溜め込んでいるにもかかわらずだ。また、資本家は高額な報酬やボーナスを当たり前のように受け取り、広い豪邸で起居し、多数の使用人にかしずかれながらふんぞり返って生活し、何一つ恥じ入るところがない。

その一方で、首切りされた元非正規雇用労働者の中にはその日の糧もままならない人も多く、駅頭や公園で夜を過ごすホームレスの姿も激増している。同じ人としてこの世に生を受けながら、このあまりの違いは一体何なのだ！？　現代日本は産業革命時代の再演だというのだろうか。もしそうだとしたら、私にはマルクスのあの警句が想起されてならない。曰く「最初は悲劇として、二度目は茶番として」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール１８日』）。

■「人間らしく生きさせろ！！」

私が参加したデモは、資本主義の本質に苦しめられている人々の怒りと抗議の行動だったのだ。

雇用主から有無を言わさぬ給与カットやパワーハラスメントなど理不尽な扱いを受けている人、資本家による一方的な首切りに対する解雇撤回のための裁判闘争を行なっている人などがいた。ホームレスと思しき人もいた。中には、時給にすれば６５円（！！）という法律違反も甚だしい雇用環境に抗議するキャバクラ労組加盟の女性もいた。

みんな怒っているのだ。余りに理不尽な世界に！ 不当な搾取に！　不均等な富の配分に！

「われわれは人間だ。人間らしく生きさせろ！！」と抗議の声を上げているのだ。

デモ開始直前には、いまや鳩山内閣の閣僚となった福島瑞穂・社民党党首も姿を見せ、あいさつを行なっていた。小政党の党首とはいえ現職閣僚が来てくれたことに、多少の希望を見出すのは必ずしも見当違いではあるまい。だが、残念ながらこのままでは、大きな展望を期待することは難しい。こうした運動が労働組合運動（とは言え、運動主体が既成の労組とは位相を異にする独立系・個人ユニオン中心である点が、既存の労働運動と大きく相違しているが）の位置にとどまっている限り、人々の怒りを社会構造変革にまで導いていくことは困難だろう。

新しいタイプの労働運動と連携して人々の怒りを集約し、エネルギーへと変える政治運動体（トロツキーの言う「ピストン筒」『ロシア革命史』）を構築していくことこそ、棄民の反撃を社会構造変革の原動力となす、唯一の手段ではないだろうか。

第９７号の誤植のお詫びと訂正

１３頁左、上から６行目、竹中発言の中の「価値」の後に以下の２行が抜けています。挿入してください。

「観を普及させた」と嘆き、資本・大企業に対する課税を大幅に低下させ、貧富の差拡大に貢献したが、それ」

お詫びし訂正します。

アラブ物語(10)

PFLPとの矛盾―73年ドバイ闘争の時代(4)

重信　房子

8、ドバイ闘争

１９７３年7月２０日、パリ発アムステルダム、アンカレッジ経由東京行きの日航４０４便のボーイング７４７ジャンボ旅客機は、アムステルダムのスキポール空港を離陸した後、ハイジャックされた。

１２時ごろのことであった。ファーストクラスに搭乗していた男女の乗客が二階のラウンジに上がり、武器を取り出そうとしたところ、カチッと音がして、手榴弾の安全装置が外れてしまった。不良品だ！ その手榴弾は、女性の乗客から夫である男Ａへと手渡されるはずの武器の一つだった。女性はとっさに自らの身を挺して手榴弾の暴発を身体に抱え込んで爆発させた。もし、そうしなかったら、飛行機は空中分解した可能性もある。夫は身のちぎれた妻が微笑んでいる顔を抱き上げる間もなく、即座に肉片の付いた拳銃を握り締めると、操縦室に飛び込んだ。本来二人で行う行動であったが、血の海を越えて、夫Ａは一人で任務についた。そして、操縦室から「この飛行機は完全に我々が支配した」とハイジャックを告げた。

この暴発音は、エコノミークラスに居た他の仲間たちには、ビール瓶の栓が抜けた程度の「ポン」という音しか聞こえなかったという。しかし、この「ポン」という音にも、ハイジャックを告げるコールサインまで、エコノミークラスの三人は動かなかった。夫Ａから一人ずつ、番号でコールが告げられると、アラブ人２人がファーストクラスに駆け上り、日本人がラウンジと操縦席へとダッシュした。ラウンジでは、作戦部隊の一人であったＡの妻と、巻き添え負傷したチーフパーサーが倒れていた。妻は腹部の大きな損傷で、ほとんど即死状態だった。パーサーは幸い腕の骨折で済み、飛行機に穴も開かなかった。Ａの妻が身を挺して防いでいなければ大変なことになっていた可能性があると、戦士たちは後に語っていた。

部隊のリーダーＢが英語の機内放送で、「我々は『被占領地の息子たち』と『日本赤軍』である。我々がこの飛行機を完全に支配している。我々の指示に従うように」と放送した。飛行機は通過する各アラブの国々の空港の管制塔に連帯のメッセージを送りながら、ド

バイ空港に着陸した。そして、部隊のリーダーＢは、飛行機からの交渉を拒否し、ドバイ空港で待機体制に入った。

一方、事件発生後、千代田区の日本航空東京支店窓口に英文の要求書が直接置き届けられた。英文で、「パリ発東京行き日航ジャンボジェット４０４便は、現在我がコマンドの完全な支配下にある。リッダ闘争の際、イスラエルに支払った賠償金に照らして、１５００万ドルの支払いと赤軍派２名の政治犯のドバイへの移送を求める。要求に従わなければ、飛行機を爆破する」という内容の要求書であった。その金と政治犯の移送に関する細かい指示も書かれていた。

しかし、日本政府、日航側は、その指示に従った行動を取らなかった。その要求書を握りつぶし、公表も実行もしなかった。もっぱらドバイ空港に待機中の実行部隊に、交渉に応じるよう求めた。

日本側のドバイ空港の管制塔からの交渉役はベイルートの大使館の知り合いのＫさんだった。彼はオリード山田の水死の際、サラーハやユセフを助け、遺体も日本に送る手続きをしてくれた人だ。後に、７４年には、とうとうクウェート日本大使館で人質にもなった人だ。「ベイルートで助けたのに、ひどい目に会うとこぼしていた」と、後に友人から聞いたことがある。気の毒なことに何度も巻き込まれた人だ。彼が誰よりもアラビア語がうまかったことも災いしていただろう。

実行部隊はパレスチナ人のリーダーＢのもとに、他のパレスチナ人１名、ラテンアメリカ人のＡ夫婦、それに日本人Ｃの５名であった。彼らはシンプルな指示を受けていた。

「飛行機をハイジャックし、ドバイ空港で待機せよ。勝利は日本人政治犯がドバイ空港に着いたことによって示される。それ以外、たとえ、アブ・ハニの名において指示がきたとしても、一切耳を傾けてはならない。交渉の権利はない。作戦成功は、予め決められた本部からの暗号指令によって、管制塔を通して知らされる。もし時間内にその指令電報が来ない限り、決して時間延長や交渉に応じてはならない。ただし、指令が届いたら、政治犯の到着は待つ。しかし、指令電報が期限内に届かなければ、直ちに、ドバイ空港を発って、リビアのベンガジ空港に着陸せよ。そして、そこで一人残らず乗客を安全に降ろした後に、ジャンボ機を爆破せよ」

これは当時のアウトサイドワークの指揮のもとでの闘い方であった。現場判断をほとんど排除したやり方である。兵士には情報を与えず、できるだけシンプルな役割を与え、命令に服従させるやり方である。実行部隊のリーダーＢには、一定のことは知らされていただろうが、部隊員には知らされない。作戦共闘に参加した者がどのような政治的地位や立場を持っていたとしても、一旦ユニットが形成されて行動する以上は兵士である。これは安全に闘いを継続していく彼らの経験から導いたやり方であった。

釈放されるべき日本人政治犯は、ドバイ空港に現れなかった。７月２４日、午前５時すぎ、ジャンボ機はドバイ空港を離陸した。そして、リビアのベンガジ空港に向かった。日本人Ｃは、「我々は日本政府に同志の釈放とイスラエルに支払った賠償金を要求したが、日本政府は二つとも拒否した。そのため、リビアに到着後、我々はこの飛行機を爆破する。それによる被害はすべて日本政府に責任がある」と、日本語の機内放送で作戦の成り行きを告げた、と当時の乗客は述べている。

そして、７月２４日午後３時過ぎに、日航４０４便ジャンボ機は、リビアのベンガジ空港に着陸した。直ちに全乗客乗務員が機外に脱出したのを確かめた後、部隊は行動を開始した。手榴弾と爆薬を使って機体爆破の準備を行い、自ら機外に出た上で、ジャンボ機を爆破した。ジャンボ機は爆破され、炎上し、残骸となった。それでも、滑走路には鶴のマークの尾翼が焼けずに残った。その後、部隊はリビア当局に投降した。

日航機の停止位置について、ベンガジ空港の管制官が滑走路を外れた待機所での停止を求めたが、リーダーＢがＡの反対を押し切って、滑走路上での停止を指示した。その上で、飛行機を爆破・炎上させた。これもあって、後にリビア当局が「敵対行為」と誤解する原因になった。これについては、作戦後に他の３人からＢに批判が為された。リーダーのＢは、着陸時に興奮状態だった。ラテンアメリカ人のＡが「爆破担当の日本人Ｃは、確実に成功させるから慌てる必要はない。滑走路上で爆破すると、リビアに迷惑がかかる」とたしなめたのだが、Ｂは「リーダーは俺だ」として、聞かずに強行したという。（後に他の２人はＡ、Ｂのやり取りを知った。それ以降、Ｂの部隊の指揮権は、不信任されて全員で決めることになったらしい。）

これを私たちはドバイ闘争と呼んだ。

９、再びバグダッドで

私は当時ドバイ闘争の前、ベイルートからやっとバグダッドに戻っていた。クーデター未遂の取り締まりの騒ぎはまだくすぶっていて、検問もあちこちにあった。出産の後、ベイルートの仲間とフィルフィル荘で、キャンプ戦争の現場の様子もアウトサイドワークのアブ・ハニとの矛盾も、お互いの現場で乗り越えていくことを、ニザールとも約束しあって別れた。

私は私で、在欧の仲間、日本の仲間たちと力を合わせて、活動する条件作りを固める役割を負っていた。すでに国内のバーシム奥平、ニザール丸岡の仲間たちは敗北と自供から立ち直って「自己批判、自己批判、そして再生の道」という自己批判宣言を発して、「ＶＺ５８」という闘う組織としての準備を完了し、アラブ赤軍とも討議・共同が再開されていた。ＶＺ５８という名前の由来は、リッダ闘争を闘った戦士たちの使用した銃の名にある。クラシンコーフのようなチェコ製の自動小銃で、この小銃の名称が「ＶＺ５８」と呼ばれていたためである。ＶＺ５８のコンタクトは彼らの仲間のニザール丸岡が継続していた。

一方、７１年の「赤―Ｐ」映画作りから上映運動を進めてきた足立さんらは、リッダ闘争後の弾圧の中から、若松プロと上映隊を切り離して、世界革命情報センター（ＩＲＦ－ＩＣ）を設立させて、アラブの闘いに呼応していった。

私たちは各々が各部署で活動しつつ、ＰＦＬＰとの協同をより広げていった。すでに、リッダ闘争後にイラクとクウェートに国内と協力して小さい貿易の条件を作っていた。これはＰＦＬＰの友人の要請によるものだった。

また、軍事技術的な協力も求められていた。これは、バーシム奥平が技術者として軍事局に入った時からの継続課題であったし、また、保安局の防諜システム上の要求からも技術チームが編成されていた。

あの７２～７３年の時点で、すでにＩＣ回路による技術開発を求めていた。私は通訳をしながら、「Intiglated Cirkit」（ＩＣ）というのをはじめて熟語として知ったのだった。在欧の仲間たちには、コンピューターや電子技術留学している人もいたし、協力できる分野だった。求められていたのは、たとえば、ソ連や社会主義国の供給するレディメードのタイマーではなく、数ヶ月または１年というタイマーの作成ができないか？ ということだった。ＩＣ回路を使えばそれは理論的には可能であり、今後この技術革新は飛躍的に進むだろうということだった。

在欧の仲間の日高敏彦さんは、日本にいた時、ＩＣ回路の分野のＮＥＣ関連の研究所で研究していた技術者だった。持ち込まれたＩＣ設計図を見て、後に日高さんが「ああ、これは自分たちが作ったやつだ」と何気なく言うのにびっくりしたものだった。

また、同時に、保安部から「防諜」として電話盗聴に耐え得る「秘話装置」ができないだろうかという要求があった。これも国内の人脈から作成可能だということも分かってきた。ただし、国内の技術者や研究者たちに安全を保障して協同する必要があった。もし、どの会社の誰がＰＦＬＰに協同していると分かれば、モサドに殺されてしまう危険があった。実際起こっていたことである。私たちは７１年から善意・無警戒ではじめたことだったが、そんな危機感をＰＦＬＰ側は当初から持っていた。そのため、こうした、いわば非公然の人材は情報が漏れやすいベイルートを避けて、クウェートやイラクなどをコンタクト場として、共同を開始していった。これは、作戦と同じくらい極秘事項だった。

私がバグダッドに居たことと通訳条件から、この技術者たちとの交流には、バグダッドで私も協同していた。

後に「秘話装置」は、世界初といわれる音声を変形した波に変えたものが作られた。しかし、しばらくして、イスラエルが同じタイプのものを作り上げたので、有効性を失ったと聞いたが、こちらの方が早かった。当時、国内にも、まだ技術の分野で連帯を生かそうとしていた人々も居た。こうした仲間の一人に、水死したオリード山田さんの友人も居た。

私がクーデター後のバグダッドにどうしても戻ろうとしていたのは、こうした友人たちのイラク来訪の予定があったためだった。

ところが戻る時期に、クーデターに直面した。そして、バグダッドの私たちのシェルターが、ＰＦＬＰの訓練所と共に、イラク治安部隊によって封鎖され、捜索を受けた。クーデターを起こした保安長官や国防大臣らの人脈がＡＮＭと親しいバース党員たちだったらしい。バクル大統領が東ドイツから帰国する時間を狙って、バグダッド空港で大統領を暗殺するところからはじまるクーデタープランらしかった。

しかし、空港上空を大統領の乗った飛行機が旋回中に、サダム・フセインらの民兵勢力に包囲されて、未遂のまま戦闘となり、殺されたり逮捕されてしまったらしい。紹介されていた高官二人も殺された。その後、国境は閉鎖され、探索がつづいた。またクルド人を味方につけるために、キルクーク地域の石油の利権をめぐって、クーデター勢力の「密約」なども噂され、ＰＦＬＰや共産党系などへの取調べが行われたという。

国境が一時閉じられたため、私はベイルートから戻

るのに遅れて、7月に入ってバグダッドに戻った。生まれてまだ5ヵ月に満たないメイを抱えて、新しい緊張下のバグダッドで活動しはじめたところだった。

その時、7月20日、ドバイ闘争のニュースを聞いた。闘争がはじまったニュースを聞いて、ニザール丸岡の言っていたアブ・ハニとの矛盾や問題は解決されたのだろうと楽観した。闘いがリッダ闘争後はじめて公然とつづいた。きっと国内の友人たちにもプラスの力を与えているに違いない。それに、闘いはアラブでも望まれたものだと考えていた。しかし、PFLPの名はなく、闘いは「日本赤軍」と「被占領地の息子たち」だという。

72年2月にも、PFLPはルフトハンザ機をハイジャックして、資金調達作戦を成功させていたと聞いていた。その時にも、PFLPと名乗らなかった。この時にはやはり飛行機を待機させ、その間に「身代金」を持ったドイツ人にベイルート市内のあちこち行くように指示して、ついにある地点でかなりの資金を手に入れたと噂話を聞いた。

イスラム世界では、公然と金員を要求するこうした作戦は、道徳に反するし、組織名を掲げられない。そのようなものだろうと思っていた。

PFLPの仲間に聞くと、「被占領地の息子たち」のアラビア語の政治声明も出されているという。しかし、数日して、作戦は暗転してしまった。作戦の意図も不明なまま、数日でジャンボ機はドバイを飛び立って、リビアに降り立ち、飛行機を爆破して、部隊はリビアに投降した。どうして、そんなに早く飛行機を爆破してしまったのだろう。

そのすぐ後、PLOも、PFLPも作戦非難声明を発した。「日本赤軍」と「被占領地の息子たち」の名で闘っているとはいっても、PFLPの作戦であることは、PLOも、また、PFLPも知っているはずなのに。居合わせたPFLPの人の話では、リビアもイスラム法で裁くと宣言したという。ハイジャックは盗みになるので、右腕を切るのがサウジアラビアのやり方だという。衝撃を受けた。

それなのに、リビア着陸爆破後も闘いの意義を示す政治声明は聞こえてこない。作戦の全容は不明なままだ。埒が開かない。当時、バグダッドは民族自立経済国有化路線で、西側の商品から新聞まで締め出して、クーデター後の厳しい監視下にある。ここにいては何も分からない。私はイラクからの出国のための手続きを大臣Aに要求した。メイはまだ母親や母乳を必要としている。メイに母乳を与えることができなくなるのだが、連れて行くわけには行かない。最後の母乳を与えると、同居の友人家族に託して、ベイルートへと急いだ。バグダッドで会う予定の来訪者たちも、またバグダッドに居た友人仲間に託して、私はベイルートへと向かった。すでに、私の体調は健康に戻っている。

10、ベイルートにて

ベイルートに到着したのは、7月の終わりか8月の初めだったと思う。バグダッドで、出国のための手続きをイライラして待った。リビアのカダフィ大佐までがインタビューで、ドバイ闘争の実行犯たちを裁判にかけると言明したというニュースに衝撃を受けた。その直後にバグダッドを出発した。記録によると、カダフィのインタビューは7月末となっているので、私のベイルート入りは、8月初めかもしれない。

ベイルートに入り、前に住んでいた山岳地帯のフィルフィル荘が今使えるからと、すぐそちらに保安局の人々に案内された。

ちょうどドバイ事件の後で、アル・ハダフには記者も多い。また、日本人のボランティアたちも、裁判にかけるというリビアのカダフィ大佐のニュースを聞いて、「なぜリビアに行ったのか？！」と、情宣局や国際関係局への釈明を求めているという。ことに、PLOならいざ知らず、PFLPが「関係ない」にとどめずに、ドバイ作戦を非難したというのは、どういうことかと、すでに日本人ボランティアが追及しているという。彼らは、声も大きく元気の良い、PFLPとしてレバノン南部で活動しているDさんたちだ。日本から足立さんも来て、その流れに合流し、待っているという。足立さんはちょうどTVのクルーのパレスチナ取材要請を受けて、私にもインタビューの打診に来ていたのだった。私も同じ抗議の気持ちだったので、すでに始まっていた抗議に加わった。

この作戦主体は、「被占領地も息子たち」と「日本赤軍」を名乗っているが、PFLPのアブ・ハニ、アウトサイドワークの闘いである。まず責任を取るべきなのに、ハバシュ議長が作戦を非難したのはなぜか？情宣局や国際関係局の仲間の話では、今、リビアとPFLPは戦争状態のように対立しているという。ナセリスト（エジプトのナセル大統領の“アラブは一つ”というアラブナショナリズムによる反植民地闘争を信奉するナセル主義の人々）の流れを汲むPFLPは、ナセルの熱烈な信奉者であるカダフィ大佐が69年9月1日に革命を起こし、王制を打倒して権力を掌握した時に、一番に祝電を送った仲であった。そんな話を

知っていたので、「戦争のような対立」には驚いた。

リビアの国内事情から文化革命でイスラム化を進めて、今ではML文献は焚書しているという。リビアには、ANMが強く根を張っている。67年の第3次中東戦争直後の大衆行動で、当時のイドリス王制を脅かしてきたのは、ANMである。当時、逮捕された被告106人の多くはANMメンバーで、5人の非リビア人も居た。ナセル主義やANM、ヨーロッパからの68年のベトナム反戦運動の影響を受けたものやML主義者もいた。反植民地闘争、石油の国有化などで、自信を持ったカダフィがイスラム主義を強めて、左翼勢力と対立になり、弾圧していたという。そんな訳で、つい最近、ハバシュ議長が「カダフィはヒットラー以来のファシストだ」と、ののしったところだという。

私たちは憤慨した。それならなおさら、なぜリビアに行ったのか？ と、怒りになった。

この頃ちょうど日本人会の友人が届けてくれた新聞に、作戦の要求書（いわゆる脅迫状）全文が載っているという。慌てて読むと、リッダ闘争でイスラエルに日本政府が支払った金に抗議し、1500万ドルの賠償金を要求をしていると書かれていた。その金はアデンに持って来るべしと、細かい持参人の便や服装指定がある。そして、赤軍派2名の釈放も、ドバイ空港に連れて来ることを指示し、要求が受け入れられない時は、ジャンボ機を爆破するという内容だった。

私たちはため息をついて、大激論になった。PFLPの国際関係局の仲間たちも「この記事は本当か？！」と怒り出した。そして、レバノンの新聞社にあちこち電話したりして、真相を確かめていた。アラビア語新聞にも載るという。

その上、ちょうど入手したばかりの7月31日付けの日本の新聞には、日航支店の受付に「置いてきた」はずの脅迫状は「投函された」ことになっていた。そして「脅迫状が早目に届かなかったので、作戦要求に応じられなかった」と、日航と公安当局が主張しているという記事が載っていた。脅迫状は21日に投函され、郵便局の仕分け作業の手違いから外国行きの郵便物として一旦他の郵便局に送られ、改めて、同支店管轄郵便局に送り返されるというミスが重なったために、23日午前11時過ぎに日航東京支店に手紙が届けられたのだとという。消印は、東京中央郵便局の22日午後12時～6時となっていた。ところが、それからでは日本円39億9千8万円と2名の赤軍派釈放は間に合わない。悪質ないたずらとして処理したという。公安当局は、この22日の消印の他に、判読の難しい21日の押し印があり、切手が多く張ってあったので、羽田国際郵便送りとなり、22日には東京空港から逆送された時、22日の押印になったものと思われるなどと、マスコミに説明している記事である。ドバイのハイジャッカーたちに内容を確認したが、否定したので、いたずらと思ったなどの記事もある。でも、交渉役の元ベイルート大使館の知人Kさんは「ハイジャッカーには、内容は伝わっていない。本人たちが交渉を拒否したためだ」と語っている記事がある。(その後「被占領地の息子たち」ら作戦側の発表は、郵送ではなく、窓口に手紙を置いてきたとの話で、まったく矛盾していた。)

しかも、一方日本政府は密かに要求された金額を英国で準備していた、と後に記事になった。公安当局は嘘をついていた。即応能力がなく、国際感覚がない。その上、国内の過激派対策の延長の「赤軍派対策」しか視野になく、あなどり闘争に敵対し、失敗させたのだった。

すでに作戦は終了していたが、アラブでも日本でも、何が作戦のテーマか？ 当時、首をひねられている事態であった。私たちは日本の新聞に載った脅迫状の内容や記事を追いながら、対策を練っていた。

「マリアン、だけどこの脅迫状本当だと思うかい？どう考えても、変だよ。人数は唯一人で来るようにと指示している。白い帽子をかぶって、アデンに降り立てと指示しているけど、マリアン、1500万ドルをどうやって一人で運ぶんだい？！」国際関係局のTが言い出した。「そういえばそうだ。100万ドルなら、100ドル札でちょうどアタッシュ大きめに一つ運んだことあるけど、それが15個なんて運べないだろう」などと大騒ぎをしている。

レポが戻ってきた。アウトサイドワークのビューローには緘口令が敷かれていて、何の情報も入ってこない。

ちょうど、リビアでは、カダフィ大佐の指揮下で、リビアのトリポリ、ベンガジからエジプトへ、数万のリビア人が国家統合要求デモをかけている時だった。石油で得たリビアの資金をほしいために、エジプト大統領サダトが、エジプトとリビアをナセルの意志をついで一つの国家にしよう、と言い出し決めた。ところが、大金は受け取ったのに、国家統合をサダトが実行しようとしないため、デモで圧力をかけていた時だった。このリビア人のデモがベンガジからさらに膨らんで、エジプトに向かった。エジプト側の国境が封鎖され、対決になりそうな時だった。

その時に、「日本赤軍」とパレスチナ組織を名乗ったグループが、突如ベンガジ空港に着陸した。そして、そのとたん、問答無用でジャンボ機を爆破したのだった。リビアはエジプトの差し金と怒っているのだろうと、ＰＦＬＰの人までが言うのだった。

ＰＬＯの保安部の話によると、リビアはどうもドバイ実行部隊をリビアへの敵対者と誤解しているようだという。

とにかく、まず、事態を把握するために打てるだけの手は打とう。そして、リビアに対し、イスラム法で裁判するなどというふざけた発言を取り消させることだ。ＰＦＬＰも、私たちも興奮していた。闘った者に対してなんと無礼な仕打ちだと。

まず、アラファト議長に会って、ＰＬＯが作戦を非難したことに抗議し、実行部隊の釈放要求に協力してもらおう。同時に、ハバシュ議長に面会を求めて、何故ＰＦＬＰの作戦をＰＦＬＰの議長が非難したのか、釈明を求めよう。それから、アウトサイドワークのアブ・ハニに会って、何故ＰＦＬＰと対立しているリビアに行かせたのか？ 日本の新聞にも出た要求書は本物なのか？ 実行部隊の安全な帰還の責任を求めよう、と３人への面会要求を決めた。そして、議長代行のアブ・アリや国際局のリーダーの合意も得た。

それから、この闘いがリビアの邪魔をしに行ったのではないと、早くリビアに、闘いの正義と正当性を訴える必要がある。私には、リビアからＰＬＯを通して７２年から、９月１日のリビア革命記念日への招待がきていた。７２年はニザール丸岡が日本へ戻らずに潜伏していて、アラブに戻って８月から９月に再会できるというので、リビアには行かなかった。

今年は作戦がリビア ベンガジで投降している。行こうとしていたが、どうするか。そんなにＰＦＬＰと対立しているなら、行かない方がいい、いや今こそ行くべきだと討論になった。

ＰＦＬＰの国際関係局の仲間は全員が反対した。まずリビア大使館と交渉しよう。その結果、リビアには、ちょうど来ている足立さんとボランティアのＥさんに行ってもらうことにしよう。詳しいことは後にして、まず政治的な闘いの正当性のためのプロパガンダを実行しなければならない。そのための作業にすぐ取り掛かるべきだという話になった。

アラファト議長、ハバシュ議長、アブ・ハニとの会見要求と政治プロパガンダ、リビア対策、三つの分担をした。山荘で皆明け方まで討論して、各々の任務を決めた。

私が山荘に残って、リビアとの会見のための英文の手紙の作成を行うこと。ＰＦＬＰ情宣局Ｂと国際関係局のＧがアウトとサイドワークとコンタクトをとって、政治声明を準備する。

パリのジャン・ポール・サルトルらの友人グループの人たちがちょうど「リベラシオン」という新聞を出したので、その友人らの協力を得て、パリで記者会見をやることにした。

当時、フランスにはサルトルやボーボワールが居たし、新聞「リベラシオン」の初期には、そうした言論人が支えたようだった。サルトルはユダヤ人だったが、あいまいな態度ながら、パレスチナ解放闘争に理解を示していた。彼はシオニズムよりも、反ユダヤ主義がイスラエルへの移民を促してるとして、例えば、サハロフ博士事件を挙げて、その温床であるソ連に対してパレスチナ人は訴えるべきだと発言したこともあった。また、「私は現在の条件のもとで、パレスチナ・ゲリラは、したい所でテロをする権利を絶対に持っていると想います。もちろん、私はイスラエル人がこうしたテロをできるだけ防がねばならないと想っています」と、発言している。

また、日本からフジＴＶの「３時のあなた」のチームが取材要求して来ている。山口淑子さんがパレスチナのＰＬＯやＰＦＬＰを取材するが、是非私のインタビューをと言っているとのことだった。当初インタビューをする考えはなかった。しかし、リビアの硬化した態度に政治的な大義を最大限主張するためには、パリだけでなく、ＴＶでも私が日本向けにやるしかない。日本には全くドバイ闘争の政治性が伝わっていず、何のための作戦か？ ということになっていると、足立さんが言う。

また、リビア対策には、リビアと対立しているＰＦＬＰが関われない以上、日本赤軍として、正面から談判すべきだ。Ｅさん中心に、まずベイルートのリビア大使館から追求しよう。大まかに分担を決めた。

ちょうど、８月のお盆の頃に庄司弁護士もベイルートに来ることになっていた。メイの戸籍のことなど足立さんが庄司弁護士に相談したら、夏休み中なら私たちに会い、話を聞くのにベイルートまで来ることも可能だということだった。メイの戸籍どころの話ではないが、リビア対策があるので予定通り来てもらうことにしよう。

数日後の再会を決めて、明け方日本人もＰＦＬＰの仲間も山荘を出て、それぞれの任務に走り出した。

（つづく）

4・3シンポジウム「あれから40年、よど号問題を語ろう」へのメッセージ

重信　房子

４・３シンポジウム「あれから４０年、よど号問題を語ろう」に集まられた皆様に、連帯の挨拶を申し上げます。あれから４０年なのですね。戦友だった９人の仲間が日本を飛び立った日々のことは今も鮮やかによみがえります。

私は２４歳でした。あの１９７０年、４月１日、日比谷野外音楽堂を一杯の人でうずめて、赤軍派の大衆的な政治集会を予定していました。前年に結成された赤軍派は、当時の学生たちの全共闘運動の憤怒や「正義」の「使命観」を背景に、秋に闘い敗北を重ねていきました。その原因を自らの闘いのあり方として検証しきれず、実に、ラジカルに闘いぬくことによって、突破しようとしていました。社会主義の国に国際根拠地をつくり、日本の革命を外と内から成功させたいと思っていました。

そんな思いを「よど号」ハイジャック闘争として、非妥協に闘いました。「蜂起の訓練をしてひそかに帰国して秋には闘いの先頭に立って闘う！」と決意のみを担保として飛び立ちました。当時の闘いの勇気と使命感は、そのように命を遂した決意の若者たちが担っていました。そして又、それは、権力の一方的な弾圧強化の結果であった為に、多くの若者たちが、また、ラジカルに共感した時代だったともいえます。

権力側は、この「よど号」ハイジャック機が、金浦空港に対峙している最中に、赤軍派の大衆政治集会の禁止、許可とりけしを決定しました。「表現の自由への弾圧だ」と救援連絡センターなど、弁護士も訴えましたが、一方的につぶされました。闘争対峙の中、多くの若者が集会をめざして全国から駆けつけながら、なすすべもありませんでした。しかし、９人の闘争は目的を遂げました。「よど号ハイジャック」は、権力を驚天させ、国民には眉をひそめさせつつ、無事に解決したことへの安堵もありました。闘いが成功した為に、痛快感、愉快な犯行としてうけとめられる時代でもありました。

そんな中、乗客の一人が金浦空港で走り書きした小西さんのメッセージを届けてくれました。日本、米国、韓国政府が一体となって、だまし討ちを計って「ここはピョンヤン！こちらピョンヤン」とよど号を金浦に誘導した様子が書かれていました。そして、それにもめげず、ピョンヤンへと勝利貫徹して進む！とのべ、乗客への感謝と謝罪の思いが、又、最後に数行、田宮さんの字で書き添えられていました。

私は、そのメッセージを受け取り、権力にとられないうちに公表しようと、当時の指導部と確認しました。そして、出発前に書き残していった「われわれは明日のジョーである」という文と「金浦からの手紙」をより広く人々に伝えるためにあれこれ交渉しました。それを当時の月刊「文芸春秋」に載せました。「文芸春秋」編集部は、「乗客百人の証言」と共に特集をくんで発表しましたが、乗客の発言の好意的なことがなんともうれしかったことを覚えています。これが当時の２４歳の私の記憶です。今から当時の「文芸春秋」を読み返したら、違ったものかもしれませんが、時代の主張の一部を私たちは体現しているという自負がありました。

以降、私もアラブに発ちました。そして、闘い続ける中で気付いたのは、私たちの「使命感」は人々の望むこととあまりにかけ離れているということでした。武装闘争を自己目的としたような、私たちの日本での闘い方のあやまりに気付いたのです。確かにパレスチナは武装闘争の地でした。「プロパガンダの最高形態は武装闘争である」ととらえ「パレスチナ解放の主要闘争形態は武装闘争である」と PLO の綱領も謳っていました。でもそれは、民族の意志と合意にうらうちされている姿でした。「民族が望む闘い方」として、武装闘争が選択されている生活の姿だったのです。ひるがえって、私たち日本の人民的、国民的合意は何なのか？人民の意志の側から、自分たちをとらえずに来た数々が身にしみていきました。そんな中日本では連合赤軍事件もおこりました。

当時をふりかえる時、自分たちは時代の子どもたちだったとしみじみと思います。「よど号」も、「アラブ行き」も、「連赤」も、当時は誰でも当事者たりうるような闘う若者が居ました。

そして今、もっとも激しく闘った者の一人としての私の教訓が「『人々と共に』現在を変えること」だと思っています。「連帯を求めて孤立を恐れず」と言いつつ、本当に連帯を求め続けたのか？　連帯はどのように可能なのか？自分のために自分たち中心では、それはうまくいかなかったことを教えられています。又、同時に闘い続ける今の闘いのあり方をもそれは解く鍵のように思います。

新しい政権は今「情報公開」を要に変化、変革をもとめています。この政権には肯定面も、否定面もあります。今こそ連帯した「国民」「市民」「人民」の力でより国民主権の実体化をめざす時です。戦後、自民党政権の中で、敵視され国交を今ももたない「北朝鮮問題」の解決は、まずもって国交を正常化することにあると思います。そのこと抜きに「よど号問題」の解決も、また、いわゆる「拉致問題」の解決もあり得ないでしょう。新しい政権にそれを求め実現してほしいと願っています。かつての時代のあやまち多き、私たちの闘いの総括とけじめとしても、それは問われていると思います。

そのことによって、新しい友好の中で、よど号の当事者も、家族、子どもたちも、日本と共和国（朝鮮）を結ぶ架け橋となることができるはずです。

本日の集いに集まられたみな様、ことにピョンヤンの地で生まれ、日本の現実の中でたくましく生きている若者たちにそうした希望の連帯とエールを送ります。

かつての過ちは過ちとしても、闘いが楽しかったという当時の空気も又彼らに知ってもらいたいところです。そして、これからの日本の楽しい変革を共に育ててほしいと願っています。

みな様の闘いに連帯し、以上を挨拶と致します。

「拡張型心筋症の丸岡さんに生きる途（みち）を！の会」で共に生きよう。

丸岡修といえば、重信裁判の証言席の姿を思い出す。丸岡は何回か続けて重信側の証言席に立ったが、その最後の回に、「（アラブの日本赤軍時代）不十分な態勢で闘わせ、迷惑をかけたことを謝罪します。」との重信の言葉に対し、「謝罪は不要です。迷惑はお互い様です。」ときっぱり言った、不撓不屈の精神を湛えた、いたわりに満ちた表情を私は忘れることができない。このとき既に丸岡は無期刑に服しており、重信は無期を求刑されての裁判であった。「一緒に闘ってた時代、無理ばっかりさせて悪かったね」と謝る重信は、いつ出れるとも知れない重罰をくらいながら、骨の髄まで反骨の精神いっぱいの丸岡の身を案じているのだ。受刑者に対する昔変わらぬ、罪人扱い、その上に見せしめ刑、さらに健康まで侵されている丸岡を見ていると、悪いことしちゃった、悪かったねと昔のことを謝らずにおれない気持ちになるのが重信なのだ。「何言ってるの。今こんな残念な目にあってるのは君のせいじゃないよ。一緒に闘って、とても楽しかったよ。君こそ重刑攻撃（無期求刑）をかけられて大変だけど、これからもお互い頑張ろう」と二人の間に交わされる無言の会話が私には聞こえる気がした。裁きの場を二人は、今に変わらぬ昔の絆を確認する場に変えたのだ。私は二人の友情に心打たれた。このような美しい光景は、今の日本滅多に見られるものじゃない。それから数年経ったが、今ようやく丸岡救援を訴えるに到った。昨年、私達は、「政治犯の不当弾圧に反対する会」を立ち上げたが、丸岡救援は長年、東京を中心に支える会によって根強く継続されており、その人たちと、先日東京で会合を持ち、丸岡救援を広く訴える会を立ち上げることができた。会の名は「拡張型心筋症の丸岡さんに生きる途（みち）を！の会」｛略称「途（みち）の会」｝で、東京のメンバーと連携し学びながら、こちら関西でも独自の救援の展開をしたい。

実は会合に先立ち、私とYの二人は、関西から仙台へと飛び、丸岡面会を果たしてきた。拡張型心筋症というのは極めて重い難病で（「拡張型心筋症の５年生存率は、かつて５０％だったが、今は治療法の進展があり、７０％程度と言われている。私は既に７年経過。１０年以内生存率は５０％前後と思われるが、心不全による突然死もある。」ー丸岡修通信誌『夢と希望』３号より）、常時酸素吸入をしている状態というので、面会に行く約束はできていて楽しみに待っているという直前の便りも貰っていたが、もしや体調を崩したりしていないだろうかと、会うまで気がきではなかった。が、車椅子で白い病衣姿で、面会室に現れた丸岡はニコニコと顔色もよく、表情がすこぶる明るく、心配も一挙に吹っ飛んだ。そして、あらかじめ用意してあったＢ４サイズの用紙にびっしり書かれてあるメモ書きをアクリル板に掲げて、そのアクリル板越しに話が進められた。ー主治医に「０８年４月の診察時は『もはや予断を許さない状態』との診断でしたが、その時と比べて今はどの程度ですか」と質問したところ、「現在も予断を許さない状態ですよ」とのことでした。ー（『夢と希望』３号）元気な表情に救われたと言っても目の前の丸岡はそのような状態であることは変わらない。そして相談している内容とは、予断を許さない状態からの改善、前進を図るということなのだから、こうして面会室で喋ってること自体が奇跡の場面といってよいだろう。そしてその奇跡の中から、丸岡の提案による「拡張型心筋症の丸岡さんに生きる途（みち）を！の会」が生まれた。第二の奇跡が生まれるか否かはこの会の活動にかかっている。７人の弁護団による「刑の執行停止の申し立て（第４次）」がなされて、速やかに外部治療が受けられるようにとの要請が、つい先日却下された。「外部治療の１日の遅れが数倍の余命短縮に追いやられており、これでは死刑判決なき死刑の執行だ」と丸岡が言う、それが丸岡の現実だ。この会を創造的に発展させよう。会員それぞれがユニークな活動を展開してもらい、その活動でもって共同していく、かつての「べ平連」のような活動ができないものかと思う。弁護士費用も会が調達しなければならないので、カンパ活動も必要だが、それに留まらず、いろいろ独創的な活動を持ち寄ろう。

もう一つ、丸岡支援がなければ仙台へ行き宮城刑務所を訪れることはなかったろう。延々と続く刑務所の塀の長さに驚いた。ここに千人を越える受刑者が収容されているという。丸岡はとても大切な私たちの友人だ。だが、〝丸岡だけが大事〟などと誰が思うだろうか。丸岡に負けず劣らず、生きる途（みち）を閉ざされている受刑者がいっぱいいる。丸岡救援とはそのような受刑者救援をともに考えることだ、この点においても、丸岡と私たちはピタリ一致している。

花招く仙台哀し獄窓に二十余年の友を訪ねて

「政治犯の不当弾圧に反対する会」緊急アピール　（文責　森本）

拡張型心筋症の丸岡さんの入院治療を実現させよう！

裁判費用カンパのお願い

宮城刑務所で無期刑に処せられている丸岡修さんをご存知でしょうか。

丸岡さんは今、「拡張型心筋症」という難病と闘っています。その病状は予断を許さない状態にあり、私たちは、丸岡さんが、必要な設備と技術のある病院での治療を一刻も早く実現させるべく、あらゆる努力をしようと、強く思っています。

丸岡さんは、１９８７年１１月、「旅券法違反・航空機の強取等の処罰に関する法律違反」により逮捕され、２０００年４月、最高裁で「無期懲役刑」が確定し、２０００年６月から宮城刑務所に収監されています。

東京拘置所に収容されていた１９９６年２月、東拘の医師の誤診による治療の遅れから、重症肺炎で意識不明が１５日間も続く、文字通り「生死の境を彷徨う」状態に陥りました。その後、肺炎の再発を繰り返し、１９９６年７月に「慢性心不全」の診断が下され、以降２０００年６月までの長期間「病舎」での生活を余儀なくされたのです。その後、移監された宮城刑務所においても、現在に至るまで「病舎」を出ることはできていません。

病状は年々悪化しており、２００３年には「心室頻拍症」発作により、２度も失神状態に陥りました。

２００４年には、ついに「重症」指定となり、心臓発作に対し宮城刑務所では対応できず、外部病院への「緊急搬送」される事態になりました。その後、「八王子医療刑務所」に移送され、外部病院で、「拡張型心筋症」と診断されました。そして対処療法として「植込型除細動器」の移植手術を受けています。

現在、病状はこれまでの最悪を示しており、医師は「慢性心不全末期にあり、いつ不測の事態が起こっても不思議ではない」という診断を下しているのです。

この、命さえ危ぶまれる事態に対し、弁護団は、２００７年１２月に１回目を、以降２００８年３月、２００８年７月、そして今回２０１０年２月に第４次と、東京高等検察庁に対し、速やかに「刑の執行停止」を行うよう求めてきました。その内容は、「拡張型心筋症」を専門分野とする「循環器系」の医師４名の「速やかな入院治療が必要」とする意見書と、「丸岡氏の入院治療を引き受ける」という「入院承諾書」を添付したものなのです。

誰が読んでも、即時の入院治療の必要性と入院先の確保を明確にした「執行停止申立」に対し、東京高検は、今回その決定を、提出から１か月と２０日後の３月３１日、またもや「これを行わないこととしたから通知する」旨、何の理由も述べず、ただ一片の通知で拒否したのです。

私たちは、このような非道な決定を許しておくわけにはいきません。「未必の故意による殺人」。東京高検の決定

は、こう表現しても言い過ぎではない、と確信するからです。

「監獄」における医療は、２００７年１１月の「徳島刑務所暴動」によって明るみになったように、「医療」の名を借りた「受刑者支配」の道具になり下がっている側面が強くあり、「人権・人道」の観点からは許しがたい実態にあります。２００２年には、名古屋刑務所で看守の虐待により、２名の受刑者が殺されました。日本弁護士連合会（日弁連）は、「徳島刑務所問題検討プロジェクトチーム」を作り、受刑者に対する聞き取りなど、綿密な調査を行い、その結果をまとめあげて、「徳島刑務所長」に対して「警告書」を、さらに、法務大臣への「勧告書」を出しました。

丸岡さんに対する「執行停止申立」を認めない検察の醜悪な姿勢は、ひとり丸岡さんに対してのみではありません。根底には「受刑者に人権なし」「受刑者の命よりも支配と管理を優先させる」というこの国の「行刑思想」があるからです。ここ数年「監獄人権センター」には全国の受刑者から毎年１３００通もの訴え（医療問題・不当懲罰・看守による暴行など）が寄せられています。

これまで「刑の執行停止」が認められた例は、非常に数少なく、しかもほとんどが「病死寸前」でしかありませんでした。

私たちは、この現実を絶対に変えなければならない、と考えています。入院治療が必要と、医師が判断しているのです。そのようにしない理由がどこにあるというのでしょうか。

「執行停止申立」が拒否された今、考えうるあらゆる法的な手段を駆使して、丸岡さんの入院治療を実現すべく、「弁護団」結成を準備しています。さらに、国内外をつらぬいて、この非道を世に知らしめるべく、各人権団体、メディアに訴える活動に着手しようとしています。

裁判費用を急いで集めなければなりません。どうか、心ある皆さんの力を貸して下さい。

「拡張型心筋症の丸岡さんに生きる途（みち）を！の会」
略称「途（みち）の会」

裁判費用カンパ送り先
郵便振替　００１２０-２-３９８８３４「帰国者の裁判を考える会」
「丸岡裁判費用カンパ」と明記ください。
連絡先：埼玉県加須市礼羽８８　平山方
e-mail:mantan１９６１@yahoo.co.jp

後　記

発行が遅れて申し訳ありません。速達で送ったにもかかわらず、東拘の方で郵便物をそのまま獄中者に速やかに配布せず、ひどいものは２週間後に配布されるといった具合で、連休とも重なり、予定通りに編集作業を進めることが難しかったことが、主要な要因です。東拘の事務作業を改善していただきたいものです。

今回はいろいろと盛りだくさんになり、掲載できなかったお便りもあります。お許しください。丸岡さんの入院治療を実現する運動に、関西と関東からそれぞれアピールが出されていますが、これは対立や諍いを示しているのではありません。昨年中はいろんなことがありましたが、画期的な共同の方向を作り出し、共にそれぞれのやり方で闘おうとしています。是非とも皆様の温かいご支援をよろしくお願いします！

まだ、判決が出ないようですね。今号の遅れにともない、次号は6月中旬に発行予定です。Y

連絡先　〒105-0004　東京都港区新橋2-8-16　石田ビル４階
救援連絡センター気付　「重信房子さんを支える会」
郵便振替　00110-4-613941　オリーブの樹
銀行口座　三井住友銀行　赤羽支店　226-3687269　オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html　　頒布価格　５００円

「正誤」表

第98号

とくになし